

## きのこは木の子？ 茸？ 菌？

倒木や切り株に群がって発生しているキノコを見るとまさしく木の子と思います。しかし、幼児語のような響きを持つこの言葉は古い文献には見当たらず、くさびら、たけ、なば等と言われていたそうです。今でも一部の地域で使われる呼び名です。

松茸、椎茸、舞茸などキノコを表す漢字「茸」の文字の成り立ちについて書かれた本がありました。それによると茸の草冠はキノコが植物の仲間と誤解されていた名残であり、下に付く耳は耳たぶの様に柔らかい事を表しているそうです。即ち耳たぶのように柔らかな植物の意味になります。

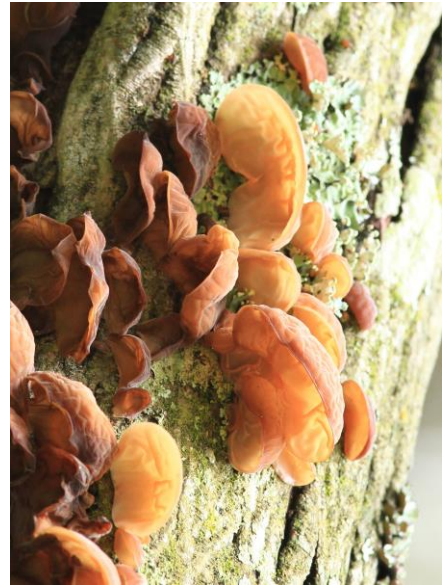
現代ではキノコは植物とは全く別の生き物と理解されていて、栄養の取り方から見れば、むしろ動物に近い生き物だそうです。光合成産物の有機物によってできている植物が枯れると様々な酵素で分解、吸収、消化して生きているのは動物的で、それもその筈、約9億年前に動物と共通のご先祖様から分かれて別々に進化をしたのがキノコであり、DNAで分るそうです。

因みに木に耳と書けばキクラゲで木から耳が生えているように見えるので納得できます。(右の写真は耳に見えるように縦横を回転して有ります)キクラゲのクラゲは勿論、中華の前菜でお馴染みのクラゲの食感に似ているからです。

又、キノコは菌類とも言われます。菌の文字は病原菌、大腸菌の様に本来微生物を表す文字と思われるのですが、この文字が登場した時代に顕微鏡などは無く、細菌そのものの存在が分かっていない筈ですから、それを表す文字も無かったのは当然です。

菌の文字は元々キノコを表わしていたのですが、細菌を表す文字に代用されて以来、最近では本来の意味が忘れて母屋を乗っ取られた形になっています。

この菌の文字を分解すると、茸と同様に草冠があります。その下にある口は建物を表し、口の中の禾は穀物の意味だそうです。合わせて穀物を貯蔵する倉に似た形の植物となる訳です。



穀物貯蔵庫と言っても昔の事ですから体育館の様に広大でフォークリフトが中を行き交うようなものではありません。写真は奄美大島や沖縄などに残る高床式の穀物貯蔵庫で高倉と言われます。

全体のシルエットはキノコに見えませんか。備蓄穀物には来年用の種子も含まれていてネズミの侵入を防ぐ工夫がほどこされた屋根裏に収納します。そこはキノコにすれば胞子が蓄えられている場所と同じですからますますキノコらしく見えてきます。

佐倉市 坂本 文雄

## 「こんなになってる！」と子どもの姿に驚く親

今年、新型コロナウイルス感染症防止対策で、観察会は中止になってしまったので、昨年の観察会から拾った「ちょっといい話」をご紹介します。

昨年8月10日実施の成田市坂田ヶ池総合公園で行った観察会でのことです。観察を終えて借用した会議室でまとめをし、感想を聞くことになりました。

子どもたちからは、「カナブンが捕まえられてよかった」、「オオヒラタシテムシの成虫と幼虫が見られてよかった」と見たり触ったりできた昆虫について感じた素直な気持ちが聞かれました。

ある母親から「いつもは子どもだけで虫取りに出かけているのでわからなかった。子どもがこんなに虫のことを知っていて驚いた」と、普段見るのとは違うのびのびとして、知識も豊かになった子どもの姿を見て、とても衝撃を受けたことを正直に話してくれました。「私の知らないうちにこんなに大きく成長してる」という母親の心の声を聴いたような気がしました。

緑いっぱいところで子どもは走り回り、頭を使いぐんぐん成長している。私たち大人は子どもの成長の姿を後ろからひとつひとつ丁寧に追いかけている余裕がありません。子どもを育てているときはきっと気づかないことも多いのではないのでしょうか。この母親の言葉で「あっ！」と思った人もいるかもしれません。こうした親と子が参加するイベントで親子がともにたくさんのものを吸収していくことができるプログラムを大切にしていきたいと思うのです。(松戸市藤田隆)



サワガニ獲りをする子どもたち（坂田ヶ池総合公園）

## 里山に咲く花

### ツルボ<蔓穂>キジカクシ科ツルボ属

田んぼの畔や明るい斜面地に多く、8月末より9月にかけて突然花穂が飛び出し下から順番に咲いていきます。葉は早春に発達し球根に栄養を貯めたあと地上部は枯れて休眠に入る。地上部が出ている期間が短いので草刈りに遭わなければ異常に増える傾向があるようです。R2.9.22 袖ヶ浦市神納

(袖ヶ浦市 赤松義雄)





# ナラ枯れ

太田慶子（千葉市）

房総半島にもナラ枯れの被害がかなり出てきている。

コナラなどの老木にカシノナガキクイムシという小さな甲虫が入って、ナラ菌を運び、それが繁殖して死ぬと道管がつまって水が通りにくくなった結果、木が枯れてしまうようだ。

昔はナラ枯れなどなかったのが（一説には、昔の里山では、コナラなどは10～15年くらい経つと薪や炭用に伐られて大木にはならなかったため、被害が発生しなかったという）、関西方面からどんどん広がり、確かに実家のある宝塚の裏山も被害が出ていた。

数年前、関西に帰省した折、駅に降り立ったら、7月だというのに向こうの山がまるで紅葉していたようにきれいだったので、どうしたことかと驚いた。今でもその記憶が鮮明に残っているくらいだ。その時は、赤くなっていたのは枯れたアカマツだろうかなどと思っていたが、その後キクイムシにやられたコナラだったということがわかった。実際山に登る途中、伐られたコナラが、キクイムシが飛び散らないようにビニールで覆われるという処理が行われていたのが目につくようになった。そしてコナラの大木が何本も伐られて明るくなったので、2・3年経つと林床にオカトラノオやオトギリソウなどが出て目を楽しませてくれ、植物にとっていかに光が大事かというようなことを感じたものだ。

そのキクイムシの被害が今、千葉県森を襲っている。

近くの園生の森（ボランティアの「育てる会」がある）でも被害は顕著で、コナラだけでなく、クヌギやイヌシデなどからも、少しベージュがかかった小麦粉のような粉が出ていて、キクイムシが入っていることがわかる。やはり木に入る害虫であるカミキリムシなど木屑よりよほど細かく、穴そのものも小さいので、カミキリムシが入ったのではないことがわかる。

園生の森もコナラの老木がかなり枯れたが、今年クヌギにも虫が入り、樹皮のあちこちに小さな穴が開いて、そこから樹液が出てそれが発酵し、今夏少なかったスズメバチもたくさんやってきていた。オオスズメバチやモンスズメバチ、セグロアシナガバチ、クロカナブン、シロテンハナムグリ、コクワガタ、ヨツボシケシキスイに、アカボシゴマダラやルリタテハ、サトキマダラヒカゲ、ヒカゲチョウなど、どこから来たのかと思われるほどたくさんの虫たちが2本のクヌギに引き寄せられた。クヌギはよほどおいしい樹液を出すのだろうと、改めて虫にとってのクヌギの魅力を感じたものだ。他の木々の場合は、単に穴から粉が出ているだけという現象だったのに。

このクヌギが森の中の通り道に沿いにあって、散歩などの人がけっこう通り過ぎてゆく。スズメバチに気づく人もいて、危ないかもと思ったが、仲間と相談した結果、そのまま何もしないでおくことにした。自然とは、そういうものだ。

ところで、園生の森などのナラ枯れの場合、木の葉はあまりきれいとはいえない褐色になって枯れていて、関西での、紅葉と見まがうような赤褐色にはなっていないのは不思議だ。

発酵した樹液に集まるオオスズメバチ



ナラ枯れしたコナラ

## 北の国だより

北海道では、9月26日、最高峰旭岳（標高2291m）において、初冠雪が観測されました。例年に比べ暖かい日が続いていましたが、ようやく、札幌市近隣の山々も日に日に秋の色に変わってきました。さて、北海道といえば、原生的な大自然が広がっていることに加え、アイヌ文化という自然と調和した独自の文化が継承されていることも特筆できますね。7月12日には、アイヌ文化を紹介する国立博物館ウポポイが開演しました。そこで、今回は、アイヌの視点から見た自然を紹介したいと思います。

### 男と女の見分け方

北海道を代表する花、オオバナノエンレイソウ（種子）です。ここでクイズです。この花は男でしょうか、女でしょうか？「実をつけているから女」と短絡的に考えてはいけません。生物学的性を聞いている訳ではありません。

アイヌでは、実の形で男か女を見分けているようです。アイヌの古老の言葉です。「実が丸くて角がなく、皮も柔らかくてすべすべしているのがマッネエマウリ（女のエンレイソウ）、実が角ばってゴツゴツしているのがピンネエマウリ（男のエンレイソウ）なんだ。」（更科源蔵・光『コタン生物記』、1976）



### 生活必需品は自然から

千葉と北海道では気候が全く異なるため、当然、生えている樹木も草花も違います。そんな北海道の自然の中で暮らしていたアイヌの人たちはどのように自然を利用していたのでしょうか？

テレビ等で見たことがある人も多いかとは思いますが、アイヌ文様の入った伝統的衣類であるアットゥシは、ニレの仲間であるオヒョウ（アツニ）の樹皮繊維で編んで作ったものです。このほか、シナノキ（ニペシニ）の樹皮繊維からニペシという衣類、ハルニレ（チキサニ）の樹皮繊維からはニカパツシという紐、イラクサ（モセ）の草皮繊維からはレタッペという帯を作っていました。植物繊維だけでもいろいろありますね。

また、木材の利用方法としては、カツラ（ランコ）から丸木舟、ノリウツギ（ラスパニ）からキセルやかんじき、イチイ（クネニ）から弓、ヤチダモ（ピンニ）から柱、トドマツ（フブ）から屋根を作るなど、木材の特性に合わせて生活必需品を作っていました。

こうした自然を巧みに利用する知恵は、受け継いでいきたいですね。



（オヒョウ）



（アットゥシ）



（カツラ）



（丸木舟）



## ヤマシャクヤクは打出の小槌？

人というのは欲深いもの。自然の素晴らしさを伝える自然観察指導員の皆さんだって、本音は、金持ちになりたいですね。そんな皆さんに、アイヌの人たちに受け継がれてきた、金持ちになる秘法を伝授します。森の中でヤマシャクヤクを探してください。

アイヌでは、「オラプ（ヤマシャクヤク）の群生地を見つけると長者になる」ということわざがあるそうです。北海道では、ヤマシャクヤク自体は比較的簡単に見つかるのですが、群生地となるとなかなか。やはり、簡単には金持ちにはなれないようですね。



## 子どもは遊びの天才

子どもは遊びの天才ですね。アイヌの子どもたちも身近な自然を使って、いろんな遊びをしていたようです。それでは、千葉でも普通に生えているイタドリ（アイヌ語でクツタラ）を使って、アイヌの子どもたちは、どのような遊びをしていたのでしょうか？

なんと、北海道教育委員会による聞き取り調査報告書には、茎舟流し、葉舟流し、筏流し、水流し、うなり、茎打ち、茎叩き、水鉄砲、籤飛ばし、茎笛、茎鼓等 10 を超す遊びが紹介されていました。この中のうなりについて遊び方を説明すると、節を抜いて中空にした茎にひもをつけてぶんぶん回して「ヒューヒュー」と鳴らして遊んだようです。宮崎駿の映画「風の谷のナウシカ」でナウシカが使っていた蟲笛のようなものだとさえいえばとわかるかな？

このほか、ネコヤナギで数当て遊び、イケマやガガイモで小舟流し、オオバコでくじ引きや玉すだれ、バイケイソウで草人形、マイズルソウで耳輪、ゼンマイで毛毬を作って遊んでいたようです。



## 名前の付け方の発想は同じなのね

植物の名前は、その形を的確に表したものが多くあります。アイヌ語の植物名も植物の花の形を表現したものが多くあります。

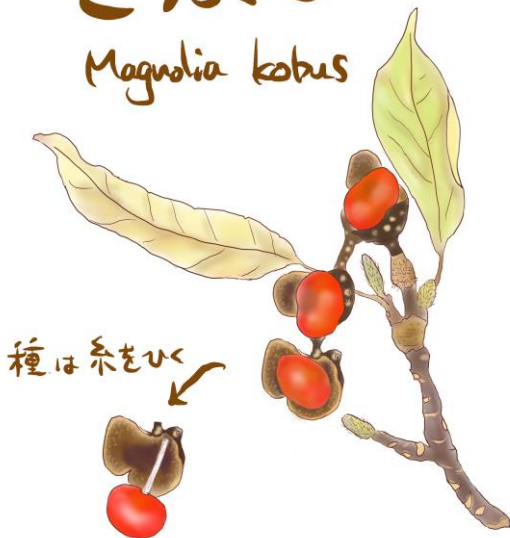
代表的なものをひとつ紹介すると、ホテイアツモリソウのアイヌ語名はセタノホキナです。どういう意味かということ、千葉で良く見かける草で例えるとオオイヌノフグリです。皆さん、察してくださいね。

佐野由輝（北海道在住）



木とキノコのスケッチ～描いて発見する自然のすばらしさ～ (中田真也子)

こぶし  
Magnolia kobus



＜コブシの実＞

千葉市中央区青葉の森公園でコブシの実を見つけました。真っ赤な実が猛暑の中にも一足早い秋を予感させてくれる気がして嬉しくなりました。

コブシは、学名もコブ (kobus) なんですね。はぜる前の果実の形がにぎり拳 (こぶし) のようなことからきているとか。春に咲くあの美しい花ではなくて実の形に注目して命名するとは、昔の人のセンスは面白いです。

赤い実を引っ張ると不思議な長い糸を引きます。風にゆれる真っ赤な実が鳥を呼ぶのでしょうか。

見れば見るほど面白い実です。

2020年8月27日青葉の森公園

＜オオシロカラカサタケ＞

キノコが沢山みられる季節になりました。我が家のある街ではオオシロカラカサタケが今年も沢山生えました。

このキノコ、上からながめるときれい (美味しそう?) なキノコなのに、裏を向けるとヒダの色が独特の緑色・・時間が経つととてもきれいとは言えない感じのまだらな色になります。絵では、ちょっとデフォルメしました。

以前は幕張海浜公園の決まった場所でだけ大量に生えていたのに、だんだん量が減ってきて、今度はまた全然違う場所で沢山見られるようになってきました。キノコの生える場所って少しずつ動いていくんですね。その栄養を吸収しきったのでしょうか。

オオシロカラカサタケは、南方系のキノコ。1990年代より全国で増え始め、千葉県では2001年に初めて発見され急増しています。増えている原因は温暖化が考えられるそうです。

落ち葉やチップなどが溜められ人為的に富栄養になっている環境に群生して生えてくるのが多く時に畑に大量に生え、有害生物扱いされているとか。幕張海浜公園では、毎年秋のきのこの観察会で盛り上げ役として重要な役割を担っています。

絵：2018年10月6日 文：2020年9月29日 幕張海浜公園

